

英語科教育法 I (第14講)

異文化理解に関する指導



目次

- ▶ 学習指導要領での扱い
- ▶ 平和教育
- ▶ 言語相対論
- ▶ 異文化体験
- ▶ 日本社会や日本文化の特質を知る(高コンテクストと低コンテクスト、縦社会と横社会)
- ▶ 異文化を理解する視点



学習指導要領では異文化理解はどのように説明されているか。

- ▶ 小学校高学年外国語の目標の1つとして、次のように示されている。
- ▶ 「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」
- ▶ **内容**
- ▶ (1) 日常生活
(2) 社会生活
(3) 風俗習慣
(4) 地理・歴史
(5) 科学
(6) その他の異文化理解に関すること
- ▶ **内容の取扱い**
- ▶ 内容の(1)から(6)までの中から、生徒の特性等に応じて、適宜選択させるものとする。その際、電子メールの交換や実際の交流などのコミュニケーション体験を通して理解を深めるようにする。
- ▶ (2) 必要に応じて、日本の日常生活や風俗習慣などを取り上げるとともに、他の教科との関連にも配慮するものとする。



学習指導要領が述べている留意点

- ▶ 次の観点に留意する必要があること。
- ▶ ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
- ▶ イ 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- ▶ ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。
- ▶ また、題材の形式としては、説明文、対話文、物語、劇、詩、手紙などのうちから適切に選択すること。



文化を理解する視点

- ▶ 文化に対する理解を深めること。
- ▶ 自分の国の文化を知ること、他の文化を知ることの両者が必要である。
- ▶ その場合、理解する視点が必要である。
- ▶ 言語相対論
- ▶ 平和教育



言語相対論

- ▶ 文化と言語の関係について説明できる。
- ▶ 言語相対論（サピア=ウォーフの仮説）
- ▶ 強い仮説→文化は言語から強く（決定的に）影響される。たとえば、日本人の考えが非論理的なのは、日本語が非論理であるからと言った考えである。
- ▶ 弱い仮説→文化は言語からある程度は影響される。

- ▶ 伝統的には西洋と東洋との二元対立の歴史があった。現代では、より複雑化して、多次元化しつつある。多次元というキーワードで現代文化を説明できる。
- ▶ イスラム文化と西洋文化（パレスティナ、イスラエルなど）



多発する民族問題と平和教育

- ▶ 世界に多発する民族問題と言語の事例を収集する。
- ▶ 歴史的には、敵対する国の言語を使用することを禁じる例がある。
- ▶ 多文化共生社会とはどのような社会であるか調べる。
- ▶ マレーシアやシンガポールの国は、3大民族、インド系、中国系、マレー系の言語や文化が併用して共存している。1つのモデルケースになる。

- ▶ 平和教育が必要とされる。第二次世界大戦は民族間の憎悪より生じた面がある。言語教育を通して他の民族を理解することが、平和につながる。語学教育は平和教育へのつながってゆく。



異文化に関する情報を集めること。

- ▶ 現代では、新聞やテレビなどよりも、YouTube, X(Twitter), Website などを利用した情報の方が、速報性や具体性があるとも言える。
- ▶ ただし、misinformation, disinformation, false or fake information も多いので、それらを見分ける力を身に付ける必要がある。
- ▶ 英語で集めることが、もっとも深く知ることにつながる。



異文化体験

- ▶ 異文化体験を積むことである：異なる国や地域を実際に訪れ、現地の文化に触れることで、理解が深まる。
- ▶ ALTなどとの接触を利用することができる。また、現代は地域社会でも外国人のかたが増えているので、英語話者とは限らずに、さまざまな異文化の人との交流を試みることができる。
- ▶ クラスにも異文化の子どもたちがいる可能性が増えている。
- ▶ 外国の言語を学ぶことである：異文化を理解するためには、その文化が発展している言語を学ぶことが重要である。言葉は文化と密接に関連している。
- ▶ 異文化交流プログラムに参加することである：学生や教育者が異文化交流プログラムに参加することで、他の文化と直接交流し、異なる価値観を理解する手助けになる。



異文化の友人を作ること

- ▶ **国際的な友達を作ることができる。** インターネットやソーシャルメディアを活用して、異なる国や文化の人々と友達になることで、異文化理解が広がる。
- ▶ 日本にいても、外国人が増えているので友人となることは可能である。
- ▶ **異文化理解の本を読むことができる。** 専門書や異なる国や文化に焦点を当てた本を読むことで、理論的な知識を深める。
- ▶ YouTube やX(twitter)を英語で読むことができる。



高（ハイ）コンテクスト、低（ロー）コンテクスト

- ▶ ハイコンテクスト文化とはコンテクストの共有性が高い文化のことで、伝える努力やスキルがなくても、お互いに相手の意図を察しあうことで、なんとなく通じてしまう環境のことである。
- ▶ とりわけ日本では、コンテクストが主に共有時間や共有体験に基づいて形成される傾向が強く、「同じ釜のメシを食った」仲間同士ではツーカーで気持ちが通じ合うことになる。ところがその環境が整わないと、今度は一転してコミュニケーションが滞ってしまう。お互いに話の糸口も見つけれず、会話も弾まず、相手の言わんとしていることがつかめなくなってしまう。
- ▶ それぞれの社会が持つ利点と欠点を考える。



グローバル社会で必要となるのは。

- ▶ グローバル社会においてはハイコンテクスト社会のコミュニケーションは十分に機能しない。本人は頑張っているつもりでも「コミュニケーションに熱心でなく、誠意がなく、能力もない」と評価されてしまう危険性が高いのである。さらにグローバル社会ではコミュニケーション能力の評価が重要なポイントとなり、そこに仕事の能力をオーバーラップさせて評価する傾向が強い。
- ▶ どんなに素晴らしいアイデアや商品を持っていたとしても、表現力がないだけで受け入れられない危険性がつきまとっている。コミュニケーション力が十分でなければ、まともな人付き合いや仕事も難しい……それがグローバル社会のルールである。



ローコンテクスト社会への転換

- ▶ したがってローコンテクスト型コミュニケーションに対応していくことは、グローバル社会への第一歩と言える。さらにこの対応は国内においても求められている。
- ▶ 日本という国家が本質的な国際化を遂げようとしているいま、グローバル化とは海の向こうのことではなく、日本国内を主な舞台として進行していることなのである。(内なる国際化)
- ▶ インターネットマーケットには国境は存在しない。外資の進出などで日本企業が外国人とビジネスを行うことも増加の一途をたどっている。



縦社会と横社会

- ▶ 「縦社会と横社会」は日本社会を読み解くキーワードとされている。
- ▶ 家族（内と外）：まず、場を重んじる社会集団といえ、その代表的なものは「家族」である。
- ▶ 英米には、家族にも、一般社会にも、長幼の序はありません。brother〈兄弟〉sister〈姉妹〉はあっても、兄、弟、姉、妹という言葉は存在しない。必要なときはやむを得ず、形容詞 older か younger をつけますが、そんな場合は極めてまれである。それに対して、日本は兄か弟かが大問題となる。双子にさえアニ・オトウト、アネ・イモウトの関係をつけるが、これが欧米人には分かりにくい。



課題

- ▶ なぜ異文化理解は必要なのか。
- ▶ 学習指導要領では、どのように異文化理解の進め方を提唱しているか。
- ▶ 日本語と英語で文化の違いが明白に異なる語彙を挙げなさい。

